

前穂北尾根 報告

日時 2012.8.17～8/19

場所 飛騨山脈 前穂高岳 北尾根

目的 バリエーション

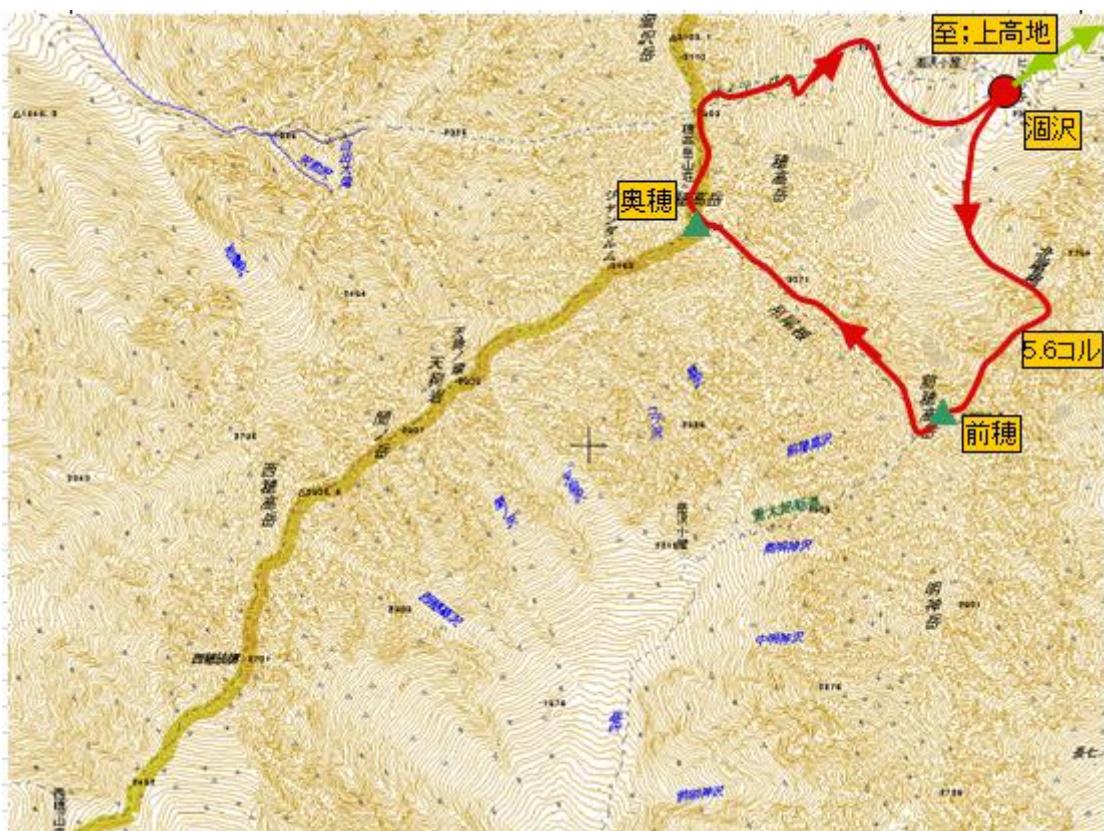
山名 前穂高岳

ルート 北尾根

メンバー 松村（リーダー）

亀井（食料担当）報告書著者

ルート図



概要 一日目 上高地より涸沢へ向かい、涸沢にベーステント設営。にて一泊。

二日目 潟沢より5.6のコルへ。北尾根を登り、奥穂高経由で涸沢へ。

涸沢ベース撤収。そのまま、徳沢へ。徳沢にて、テント泊。

三日目 徳沢より上高地。そのまま帰宅。

～山行報告～

前穂高岳 北尾根。

著者は、北アルプスには、ほとんど行ったことがないです。前穂高岳がどんな山なのかは、昨年の北鎌からみた景色でしか、知りませんでした。

穂高といつたら有名な山。登ってみたいけど、一般路は登れるだろうなーと思っていた著者でした。

北尾根という、魅力的な印象を受けた尾根を知ったのは、去年の北鎌。

ギザギザした北尾根に、グッときたわけです。

リーダーは、松村さん。著者は、食料担当。

上高地や涸沢などに、あまり知識のない著者です。リーダーはとても詳しく、ルートや行動計画は、リーダーに全て立ててもらいました。

食料担当の著者は、自分が食料を担当したということを忘れていました。

担当だったのを、出発三日前に気付き、二日前に買い出し。イトーヨーカドーで悩みながら、食料を購入しました。CMでやっていた、おいしそうなラーメンと、おいしそうなチャーシューが目に入り、これは食べたい！と、悩みながらも、軽量化に努めようと思っていました。実際、それほど軽量ではなかったです。アルファ米もあったのですが、いつもそれでは味気ないと思い、チャーハンの素というのも購入しました。結果は、まあまあ。でも今後もっとよく出来る可能性を秘めたものになりそうです。



～一日目～

今回、合宿といつても二人なので、著者はリーダーを迎えて行くことから出発となりました。最近買ったザックを今回初めて使ったのですが、二人でのテント泊ということもあり、ザックの容量が小さく、ザックがパンパンになってしまい、その分を負担をしてしまったリーダーには、申し訳ないことをしてしまいました。

上高地に向かう道中は、計画の事やら山の事やら、色々と話して、あっという間に沢渡の駐車場につきました。

駐車場で、乗合タクシーが 800 円で上高地だよーと言われ、これはお得w とすぐに乗り込みます。朝一番、まだバスですら運行していない時間ですが、上高地に赴く人は多いです。タクシーに揺られ、眠気に誘われそうでしたが、著者は、これから山行にワクワクして、寝れませんでした。

早朝の上高地は、人もまばらで、さわやかな朝です。登山案内所に掲示されていた、事故の張り紙に少しビビリ、わかっているつもりでも、やはり山というのは危険がともなうものだと改めて思いました。

上高地より涸沢までは、それといった危険はないです。途中、多くの登山者とすれ違いましたが、山ガールの気配は薄かったように思われます。

すれ違う登山者の中には、私たちの姿を見て、「どちらに行くの？」と声をかけてくる方もいました。やはり、ヘルメットとロープを携えている登山者は、少し雰囲気が違うとは思います。

涸沢までの道中、印象に残ったことがあります。子どもも多いということです。涸沢は北アルプスでも人気らしいので、家族で来るのでしょう。沢山の荷物を背負うお父さんは立派です。そういう自分たちも、二人での山行にも関わらず、4~5 人テントを装備していました。かなりのオーバースペックです。装備は、お互いで分けながら持っていましたが、重い荷物と蒸し暑さに、体力の消耗は激しかったです。やはり、軽さは重要です。

フーフーいいながら、涸沢へ到着。涸沢は、なんとおしゃれでしょう！著者は、初めての涸沢です。人も多く、山小屋も綺麗です。景色も綺麗ですが、北尾根登攀に不安が無いわけではなく、北尾根を何度も何度も見てしまいます。

三日間のベースとなるテントを設営し、明日の北尾根まで、たっぷりの休憩としました。まだ、太陽の位置も高く時間も早いため、涸沢ヒュッテの売店で、おでん+ビールセットを購入しました。二人で乾杯！！不思議といつもより美味です。北尾根をバックに、オープンテラスの座敷で飲んでいると、雨が降ってきました。雨は強さを増し、テントに避難となってしまいました。天気予報でも、それほど良い予報ではなかったため、雨はある程度は予想していましたが、雨の中、北尾根に行ってもなぁ・・・・と二人の意見は合致していました。今後どうするかを話し合って、「明日朝起きたときに天気が良いようだったら、北尾根を攻めましょう。しかし、この天気です。雨だったらそのまま帰宅ですね」

そう話し合い、ほぼ雨だろうと思っていた著者は、持って帰っても仕方のないお酒を、ぐ

びぐびと飲み、寝袋へと滑りこみました。消灯後、雨は降り続き、あとは帰るだけだと、北尾根への気持ちは萎えていました。一応、朝三時起床・朝四時出発に合わせて、起床時に天気を確認はしました。



～二日目～

朝三時起床！

ウホウ すばらしい満点の星空です。予想とは真逆の天気です。

「これは、北尾根ですね」

一気に気持ちをアゲアゲに高め、準備を始めました。朝飯をかつ喰らい、暗闇の中の北尾根を目指し、雪渓へのアプローチ。帰宅モードから、登攀モードへのスイッチの入れ替えが完了！帰宅だろうと思って落ち着いていたおかげか、変に緊張感がなく、朝から快適な気分でした。

必要な装備以外はテントにデポしてきたため、北尾根アタックは軽量装備で向かいます。

ヘッドライトでの雪渓歩きです。著者は軽アイゼンを持っていませんでした。リーダーは軽アイゼンを装備。やはり、軽とはいえるアイゼンがあったほうが良かったと、今でも思っています。表面がカリカリに凍っていると、さすがに滑ります。

後方、ヘッドライトが光っているのが見えました。夜も明けきらぬ暗い闇に、北尾根を目指す武士が他にもいました。

最初の目的地は5・6のコルです。雪渓歩きを進めるより、雪渓を巻いて踏み跡を歩いて向かうのが一般的なようです。雪渓上部は斜度も増していくので、アイゼンが無いと行動速度が落ちるような印象でした。

踏み跡をしばらく歩き、5・6のコルは目の前です。後方には、北穂高岳が朝明かりに照らされ、その山容を露わにしていました。

5・6のコルに着き朝の光に照らされ、涸沢側には吊尾根・奥穂高・北穂高。奥又側には、白池・梓川・富士山も遠くに見えました。天気は、申し分ない素晴らしいものです。

5・6のコルにてハーネスやガチャの準備をしっかりと整えました。ここでリーダーより、一応ということでカムを渡されました。結局のところ著者は使わなかったのですが、リーダーは使う場面に遭遇していきます。登攀において、余計な道具は重量を増すだけと思いますが、著者もカムやナットはそのうちそろえようと思いました。

お互いの無事と、ガチャを確認しあい、いよいよ五峰へととりつきました。五峰は特に問題無いと思います。基本、稜線を進めばよく、変にトラバースなどを考えず行けばよいと思います。とはいえバリエーションは油断は禁物ですので、浮石や落石には十分注意しながら、リーダーと声を代えあいながら登って行きました。



五峰はあっという間に登り切ってしまい、すぐ四峰の取り付きにたどりつきました。先行情報では、四峰はガレ場も多く落石も多い。涸沢側にも奥又側にも踏み跡らしきものが多数、とのことでした。われわれ二人は、事前情報とDVDにてある程度知識に入れておいたので、慎重にいけばそれほど間違はないだろうと思っていました。しかしこれがま

さかの、今回の北尾根での最大の核心となった四峰でした。

四峰登攀開始、ロープは特にださず。登り始めは涸沢側に巻きながら登り、あまり涸沢側に行かないようにしながら、大岩まで登る。大岩より奥又側へ巻いてゆき、また涸沢側へ巻いてゆく。ここで、今回の核心がおとずれました。

大岩にたどり着いた二人は、予定通り奥又側に巻いていきました。しかし、巻き道がずっと続いている・・・？こんなに巻くだろうか・・・？この先は、おかしそうだと思った著者は、怪しい巻き道の手前の涸沢側へと登れそうなところではないのか？とリーダーと話し、リーダーがそこを登り始めました。

圧倒的に著者より登攀力のあるリーダーが苦戦。クライミングシューズを履き、ロープを使い、カムを使い、ハングを登攀。しばらくし、著者がセカンドで登攀開始。まさかの超超苦戦。クライミングシューズを忘れた著者は、ごつつい登山靴でアタックしましたが、今までの登攀で最大級の苦戦でした。ここは完全なクライミングになってしまいました。お互い登り終えた後に、確実に自分たちが行こうと思っていたルートでは無いですねとなりました。DVDで得ていた情報だと、ロープも出さずにすいすい歩いていたので、こんなにがっつりクライミングの要素があるわけないです。しかし、それも登ってしまえば後の祭り。むしろガラガラしたところをロープなしで歩くより、しっかり登ってしまったほうが安全なのかもしれません。まさに今回の北尾根の核心！と言える、思い出深いバリエーションです。このときに、後方にいた二人組に巻き道よりぬかされました。あえてのバリエーションのクライミングですか？的な事を言われていましたが、いえいえ、間違えただけです。

四峰も上部に近づいてきました。その後は特に問題なく進み、いよいよ高度感も上がって来て、遠くには槍も見えてきました。

四峰頂上は広めで、三峰の取り付きから三峰の上部までよくみました。抜かされた二人組は、3・4のコルで休憩します。私たちも、広めの3・4のコルで休憩していました。私たちも遠巻きに三峰のルートファインディングをしていて、3・4のコルにて抜かされた二人組と話していました。その二人も北尾根は初見で、ルートなどを話していました。御先にどうぞ。と二人組に言われましたが、四峰で手間取り抜かされた身。じゃあ行きますねというのは少しずうずうしいので、先に行ってもらいました。

1ピッチ目。リーダーは難なく登り、私も続いて登りました。ルートは奥又側を少し巻いていくような感じで行きました。登山靴でもいけるような感じではありましたが、若干細かいところがあったので、クライミングシューズをはいていたほうが、安心して登れるかと思われます。ハーケンもところどころ打ってありました。気持ちいい1ピッチ目です。

2ピッチ目。大きな二本のチムニーの下にて1ピッチ目は切り、そこから右側のチムニーを登ることになりました。左のチムニーは、リーダーなら行けると思いますが、登攀力がないうえに登山靴の私には、無理そうだなと思われました。

右チムニー上部より、少し奥又側に巻くようだったのですが、そのまま直登して行きまし

た。フォロワーの私は、リーダーのビレイにて登って行きました。リーダーの中間支点を回収しながら登って行くわけですが、ここで、地面にポテッと落ちているスリングとヌンチャクがありました。直登でいったルートにはあまり登られた跡が無く、ハーケンや残地がないようで、マイナールートでした。岩にスリングにて支点をとってあったみたいなのですが、上部方向に登っていった段階で抜けたようです。ロープの引いていく方向などもあるとは思いますが、支点というのは難しいです。

3ピッチ目。チムニーより少し上部にて2ピッチ目を切りました。3ピッチ目は一応ロープを出してピッチを切る形で登りましたが、ロープが無くとも登れるかな？といったくらいです。一気に三峰上部にあがり、目の前には二峰。その先に前穂の頂上が見えます。三峰頂上は少し危なげです。大きな岩が折り重なるように立っているので、油断は禁物です。ロープも無く気持ちも少し途切れそうなポイントが、本当に危ない核心なのかもしれません。三峰頂上からは、前穂の頂上にいる登山者が見えます。やはり、北尾根からくる人が気になるようで、こちらを見ています。なので、大きく手を振ってみると、向こうも大きく手を振ってくれました。

三峰より二峰はすぐ目の前です。

二峰頂上も少し危なげです。懸垂のポイントはとても足場が悪く、セルフをとっていないとものすごく不安になるような場所でした。（私は、バリエーションをやると、セルフが大好きになります）

二峰頂上から懸垂です。残置のスリングなどはワサワサあり、なんぼでも懸垂ができそうでした。しかし、岩がごつごつしたところにある懸垂ポイントなので、ロープがひつかかるかもしれないという不安感はありました。（過去の嫌な思い出が・・・）二人とも降りてロープを引き、問題無くロープが流れてくれた時は、何とも言えない幸福感がありました。懸垂が終わると、もう頂上です。ちょっと登ったら前穂の頂上に着きました。北尾根の三峰・二峰・頂上というのは、ほぼ一つの峰と言ってもいいくらいあつというまででした。

頂上は広く、登山者も数人いました。先に行った二人組ともお会いして、お互いの北尾根の写真を撮り合いました。

北鎌の時ほど人はいなかったので、拍手喝さいといった頂上ではなかったですが、数人の登山者にはお言葉をいただきました。

頂上は時折、北尾根の景色が見え、まあまあの天気でした。上高地側は全く見えず、吊尾根は良く見えました。

なによりも、北尾根から前穂の頂上に立ってみてみると、一緒に登ってこれた素晴らしい仲間がいることが嬉しいです。

頂上にはそれほど長い時間はいなく、さっさと下山にとりかかりました。

時間はまだまだ午前中ですが、天気が悪くなるという予報だったので、早めの撤収が吉であると、山屋感が身についていました。



吊尾根歩きは何ともかたるく、特に面白いことは無かったように思います。

途中、奥穂高岳山頂で写真を一枚。奥穂高に初めて来た著者ですが、これといって感動はなかったです。

しばらく歩いていると、奥穂高山荘が近づいてきました。すると、ぱらぱらと雨が・・・。山荘直前で、どしゃぶりになってしましましたが、ぎりぎりセーフで山荘に滑り込み、雷と雨が去るのを待つことになりました。山荘内は、雨で避難してきた登山者でごったがえし、少し疲れが出ていた著者は、椅子に座ると寝てしまいました。一時間半くらいか、リーダーが雲が切ってきたのでそろそろ行けるでしょう、との判断で、止みかけてきた雨の中を出発しました。

ザイテングラードをすたすたと駆け下り、一応、雷を気にして、離れて行動をしていました。

♪ ♪ ♪～。なにやら涸沢が騒がしいです。

遠目に、涸沢ヒュッテに人が大勢集まっており、ピンク色した服のかたまりが見えます。

山の中に、管楽器の音色が響き渡り、合奏団が演奏をしています。

今日はこんなイベントがやる日だったのか～！音色が疲れを癒し、足どりも軽やかになるようでした。私も楽器が出来るようだったら、山を持って行くのもいいな～と思いました。涸沢山荘にたちより、アイスクリームを食べました。北尾根バックのアイスは格別です。





このころには雲も切れ、空が良く見え、常念岳のほうまですっきりと展望しました。
涸沢ヒュッテのテント場に着き、さっそく上高地に向け準備を始めました。
というのも、到着時間が早く、今日上高地に降り帰宅へといけてしまうのではないか？と

話ており、実際、二人とも行動も早く、歩きも強いので、上高地にいてバスかタクシーがあればそれに乗ってしまいましょうとしていました。

合奏団の音楽や、涸沢の景色に少しもったいなさを感じおりましたが、合奏の音楽を背に、下山道を歩き始めました。

横尾までの途中、体調が悪い方がいるという家族と出会いました。その家族は横尾に一泊の予定とのことでしたが、横尾への到着が遅くなるというむねを、横尾の受付に伝言していただきたい、とリーダーが受けました。その場所では、まだしばらくは日が明るい時間であったので、日が落ちる前には着くだろうとは思いました。

私たちは横尾に着き伝言を伝え、ひと休憩。しかし、上高地のバスが何時に終わってしまうかわからなかった私たちは、時間に余裕を持たせることも気がかりで、すぐに出発です。疲れもでてきた私たちは、もくもくと歩き続けました。

とりあえずは徳沢までだ。雨と湿気と暑さで、体力は消耗していましたが、歩みは止めません。

徳沢へ道中、すこしうす暗くなってきたかな？という空模様で、前から来る人も、後ろに歩いている人もまったくいなくなっていました。すると、前方に中年の方、四人がいました。一人の様子が明らかにおかしいです。話をきいてみると、腰をおかしくしてしまったようで、二人に支えてもらいながら歩くのがやっとの状態でした。横尾より出発したが、これほど状態が悪いものだと思わず、徳沢に行こうと出発したことです。私たち二人に、徳沢にいくのだったらタクシーを呼んでもらいませんか？と頼まれましたが、多分無理でしょうと断りました。厳しいようですが、ゆっくりでもその人は歩いています。腰が痛いからタクシーを呼んでくださいでは、山をなめすぎてるのではないのでしょうか？確かにここは、山荘への物資の為に車が往来しています。完全に山の中だったらどうするんだ？もっと症状が悪くなったらどうするのか？と考えはしないのでしょうか。徳沢までは距離はありますがお気をつけてと声をかけ、われわれは先を行きました。

徳沢に着き、徳沢園の受付で上高地のバスの時間を聞きました。バスやタクシーがどうのこうのと言うよりは、釜トンネルが20時で閉まってしまうとのことで、徳沢にいる我々はあと一時間ちょっとで上高地までいかなければ、帰れないという情報を得ました。

すぐにテントの受付をし、徳沢でビールで乾杯となりました。

疲れもあり、ご飯をたべてお酒を飲んだら、すぐに寝てしまいました。

～三日目～

徳沢テントにて起床。朝一の上高地のバスを目指し、出発しました。

天気はすごくよく、明神岳は立派に美しいです。

上高地までの道中、山方面に向かう登山者・観光者がとても多く、やっと上高地感を味わえました。

駐車場までバスに乗り、やっと帰ってきたという実感と安心感と満足感でいっぱいです。

帰りは、松本市内にて銭湯にはいり、すきやにて牛丼をいただき、帰りました。

道中、マニアックな話もでながら高速をひた走りました。マニアな話にも絡んでいただけるリーダーです。



～感想～

- ① ルートファインディングの難しさを感じました。北鎌の時とは違い、自分で判断しなければなりません。結果登れてしまったからOKというのではなく、ほんの少し状況・環境・体調などが変われば、一気に山は牙をむいてきたと思います。
- ② リーダーの判断はすばらしかったです。特に、雨で停滞の時。自前の的には、ちょっとくらいの雨なら行ってもいいのでは?などと思っていました。しかし、現実はその時、槍のほうで落雷により死亡事故。考えが甘すぎました。
- ③ 今度行く時は、クライミングシューズを持って、リードできればいいなと思います。しかし、次回行く時は、アイゼンかもしれません。
- ④ おしまい